
世界の表裏 BLACK or WHITE

清川 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の表裏 BLACK or WHITE

【Zコード】

Z9080

【作者名】

清川 流

【あらすじ】

ファンタジーなんて信じてなかつた

毎日やりたいことだけやって
やりたくないことは適当にながして

それが俺ごくごくありふれた高校一年相沢祐一だ

だから俺はいまだに信じていない。

もう一つの世界とか炎や水を操れる能力とか
命がけの戦いとか

だから俺は信じていない

俺がそんなファンタジーの世界の主人公だなんて

一つの世界を舞台に繰り広げられるアクションファンタジー
始まります

世界の表裏

かつてこの世界は神がもたらした2つの要素からなりたつていた。

ひとつは世界に活力を与え導く『光の力』

ひとつは世界を育み見守る 『闇の力』

人々はそれぞれ『光の民』『闇の民』に別れ世界を支えまた世界に支えられていた。

しかしこの頃からか2つの民は争い始め空を焼き、海を裂き、大地を喰らい
やがて世界の均衡が崩れ始めていった。

それを嘆いた神は告げた

『この哀れな世界を作りしは我、支えしは人、争いをもたらすは力。
ならば新しい世界を、互いが交わることのない世界を』

神は世界を二つに分けその二つの片割れは『闇』の無い世界
そして『光』の無い世界となり新たな世界として生まれ変わり争
いは終末を迎えた。

なおも神は告げる

『許しておくれ、今度は我がそなた達を支えよう

許しておくれ 我の子供達

第一章 非日常との邂逅1

「以降二つの世界はお互ひふれ合つことは出来なくなつたという。」「よーし座つていいぞ相沢」

教壇に立つ教師のその一言で

「ういース」

と今まで朗読していた教科書を閉じ、相沢祐一は氣だるそうに鬱^{うが}色の髪をかきながら席に腰を落とした。

昼前^{いざ}ということと席が窓際なので暖かな日光のせいで思わず欠伸^{うなげ}が出そうになるがそれをなんとかかみころす。

頬杖^{ほのき}をつきながら視線を教卓に向けると担任の社会科担当の中年教師が次に誰を当てるか視線を走らせていたが標的が決まつたらしく。

「それじゃあ次のページを姫坂読んでみる」「はい」

返事と共に紅い髪を肩で切り揃えた翠の瞳の少女、姫坂・ヒスカ・シャステイールが立ち上がり朗読を始める。

（まあ無難な選択だよな、あいつ朗読上手いし）

そう考へながらなんとなく彼女に視線を移す。

「先述の神話『世界の表裏』は紀元前300年前に作られたものと言われておりその内容から古代の人々がいかに神々を始めとする神秘的な存在を尊重し……」

内容は先ほどの神話の解説文だがヒスカの朗読は先ほどの祐一の気だるいオーラが伝わつてくるそれとはまるで違^{たが}いクラスの誰もがその声に耳を傾けている。

「なあこの神話はその解説に諸説あり本教科書に掲載されているものがもっととも有力とされている、終わりです。」

教科書を閉じ席に腰を下ろすヒスカ、その動作もどこか優雅に見える。

「よし、こま姫坂が読んだようにこの神話については教科書に掲載されているものがもつとも有力とされているが俺はそうは想わないなぜなり……」

（あ～あまた始まった、岩崎の熱血自論解説、こんな眠くなる授業昼前にもつてくんnya）

高校に入学して一週間、この授業もわずか一回田だがどうもこの教師の熱血ぶりは性に合わない。

どうせ聞く気は無かつたので頬杖をつきながら祐一は
(起きるころには終わってんだろう今日は午前授業だしこの後はゲーセンにでも寄つてくか)
などと考えながら眠りに落ちることにした。

第一章 非日常との邂逅2

放課後（と言つても午前授業だったの時刻は12時を少し過ぎたところ）

相沢祐一は校門をくぐり帰路につけと/orとしていた。

彼の通う《私立聖学院高等学校》は都心の中心部にありながら校庭、体育館、

さらには分校舎まで所有する大規模な高校である。

そのため校舎の周りにはコンビニ、本屋、ファーストフード店など学生に

とつてありがたい店が並んでおり、10分も歩けば繁華街にでることができるので

放課後は街で遊んで帰る生徒も多い。

祐一も（ゲーセンにでも寄るか）と考え繁華街へ向かっている。先ほど授業中に

昼寝したせいか少し頭が冴えないが少し歩いてれば覚めるだらう、そんなこと

を考えていると、「祐ーーーーーーーー」と盛大な叫び声と共に誰かが後ろから

こちらに駆けてきていた、振り替えるとそこには。

「もー、ハアなんで先にハア帰っちゃうのよー！」

「お前こそ道の真ん中で人の名前を大声で叫ぶな」

肩で息をしている姫坂・ヒスカ・シャステイールの姿があった。

「だつてそうしないと祐一気がつかないじゃない」

そう文句を言いながら走ったことで乱れた髪と制服を直していくヒスカ。

「はあ、そんでお前なんの用？合唱部のほうは良いのか。」

「今日は休み、そんなことよりも。」

「なんだよ。」

どうせ大したことじゃないだろと考えながら相手の顔を見ると。

「祐一。」怒っていた、声は静かだが確實に。

「岩崎先生の授業中寝てたでしょ」

「お前、そんなことのためにわざわざ走ってきたのか?」「当たり前でしょ!」先程と違い今度は大声で叫んでくる。

(はあ、また始まつたヒスカのおせっかい)

「ううなると話が済むまで帰してくれないのは昔からわかっているので。

「あのや、俺もう家に帰りたいから。」

とヒスカを無視して歩き始めたことにした。

「あ、ちょっとまちなさいよ」

ヒスカも後から追いかけ横に並ぶ。

(こいつに絡まれたらゲーセン寄れそうにないな。)

本日の予定を諦めると今度はビーツやつてこの小五月蠅い幼馴染を退けるか考えることにした。

「だいたいなんで高校に入つてから神話やら教師の自論やら聞かされなきやなんねーんだよ、それにこの制服だってブレザーなのになんて白なんだよ、フツー黒か紺だる。」

そっぽやきながらヒスカの制服を指差し話題をずらそうとするが。

「たつた一週間でよくそんなに文句ができるね制服の色くらこ我慢しなよ、それに祐一、約束したよね?高校入つたら真面目に授業受けりつて、受けるから受験勉強手伝つてくれつて。」

「それは…」

「真面目にやるつて言つから手伝つたのにたつた1週間で破つたよねたつた1週間で!!」

「いやだからそれは。」昔から「うなると彼女は止まらない」とを祐一はよく理解していた。

学校ではその整つた顔立ちとスレンダーな体つきから男子の人気は高く女子に関しては元来の積極的な性格からすでにほぼ全員と友人になつたらしく名実ともに彼女はクラスの中心になつてゐる。さら

には高校側から是非入学してほしいと誘いを受けるほど中学時代から合唱部で活躍していたためヒスカのファンは2、3学年にもおり声をかけられるなど校内で彼女を知らない生徒はいないほどだった。しかし学校以外、とくに祐一に関しては祐一曰く『お節介』だつた。受験のときなど

「祐一が寝坊しないように今日は家に泊まる」と
と無理やり泊まらせたそうにもなった事がある。
(今日もこれに付き合わされるのか)

恐らく家に着くまでこのお節介な説教は続くだろう。まだ逃げるチャンスはあるかと少しばかり考えていたが今回は理由が自分だけに逃げられそうもない。

「ねえ聞いてるの！」
「きいてるきいてる。」
そんなやりとりをしながら（しゃーないから今日はこいつに付き合つか）と逃げることを完全に諦め家路につくことになった。

第一章 非日常との邂逅③

「ちょっと祐一聞いてる！」

「きいてるきいてる。」今日はいつたいどのくらいこのやり取りを繰り返しただろう、少し呆ながら箸を進める祐一。おかげのひじき入りハンバーグを一口サイズに切り白米の上に乗せてかきこむと丁度茶碗の中身が空になる。

「祐一君おかわりいる？」

「ちょっと祐一聞いてる！」

「きいてるきいてる。」今日はいつたいどのくらいこのやり取りを繰り返しただろう、少し呆ながら箸を進める祐一。おかげのひじき入りハンバーグを一口サイズに切り白米の上に乗せてかきこむと丁度茶碗の中身が空になる。

「祐一君おかわりいる？」

「あ、はい頂きます。」

「もうお母さんこんなにおかわりなんて出さなくていいよー。」

祐一の正面の席に座っているヒスカの威勢の良い声がフローリングのマンションに響く。現在祐一達はヒスカの自宅キッチンで夕食を摑っている。

「ヒスカそんな事いわないの、『ごめんね祐一君いつもいつもうるさい』って。」

空の茶碗を受け取ながら流暢な日本語でヒスカの母親、姫坂ペトラは少し困ったようにヒスカをなだめる。ジーンズとクリーム色のセーターと地味とも見える服装だがヒスカと同じ翠の瞳と紅いロングヘア・そしてシャープな顔つきから誰しもから美人と言われる美貌の持ち主だ。

瞳と髪の色からわかるようにれっきとした海外の出身なのだが普段の言葉遣い、本日の夕食のメニュー（ひじき入りハンバーグ、大根の味噌汁、小鉢でほうれん草のお浸し）をみても。

(こつ見てもペトラさん感性つて丸つきり日本人だよな) と祐一は思っていた。

ぼんやりそんなことを考えてると左斜め前から茶碗が差し出される、

それを受け取りながら

「ありがとうございます」さいますヒスカの方は慣れてるんで大丈夫っス」

そう答えると

「なんですって――――！」

正面の席から叫び声が飛んでくる。

「貴方は少し落ち着きなさいヒスカ」

「でも～」

「でももへチマもありません」

「うう」

想わず椅子から飛び上がろうとしたがペトラになだめられ渋々黙ることにするヒスカ、黙りはしたがまだどこか釈然としないらしくブツブツなにか呟いている。

(こいつ学校だとわりと静かだけど家だとうるさいんだよな)

そもそも何故祐一がヒスカと共に食事をしているかを説明するには少し時間を遡る。その後ヒスカのお節介を聞きながら帰宅したはいが特にやることもないでのブレザーの上着を脱ぎネクタイを緩め自室のベッドで昼寝を始めると先程授業中寝たにも関わらず睡魔はすぐに襲ってきた。そのまま体を委ね気付けば時刻は7時半過ぎ、日は完全に沈んでいた。

現在祐一の両親は海外で仕事をしているため一戸建ての家には自分独り、夕食をどうするか悩んでいると携帯に着信履歴が残っているのに気付きそれを開くと留守電が入つており。

『もしもし姫坂です実はね少し夕飯を作りすぎちゃったからもし良かつたら祐一君食べにこない?』

とペトラの誘いを受けて現在に至っている、幼馴染で両親が共働きという環境からペトラはたまにこうして食事に誘ってくれている。祐一にとってヒスカは小五月蠅いがペトラの料理は想わず店を開

けば繁盛するであろう腕前なので願つてもなかつた。そして制服のままヒスカの自宅のマンションの一室を訪れ。

「何であんた制服のままなわけ。」

と私服のTシャツと短パンに着替えたヒスカから例の「J」とくつつ込まれてから同じような会話を繰り返しながら食事をすすめていた。最後のおかずを食べ終わりお茶で喉を潤しテーブルから立ち上がる。

「じゃあ今日は『J』馳走さまでした。」

「あら、もう少しゆっくりしていつたら

「いえ、今日はもう遅いしそれに……」

ヒスカに視線を向けながら。

「これ以上いたらまたヒスカに怒鳴られそうですから

「なにーそれってどういう意味よ?」

「おおつとそういうわけで今日は退散させもらいまーす」
そつ言いながらペトラン一度頭を下げてから玄関に退散することとする、後ろから。

「にげるなー」と怒鳴るヒスカの声と。

「またいらつしゃいね~」とペトランの声がする、その声を聞きながら靴を履き玄関のドアを開けもう一度「ごちそうさまでしたー」そう告げて祐一は姫坂家をあとにした。

1階のロビーを抜けて外に出ると春とはいえ少し肌寒い風が吹いている、時刻は9時3分と帰るのには丁度いい時間だ。

「明日は土曜だしなにすっかなー、とりあえず今日行けなかつたゲーセンでも行つて……」

「のとき祐一はまだ気付いていなかつたマンションの屋上から自分を見据える瞳があつたことだ。

「あれが……」

セミロングのカラスの様な黒髪、胸元まで開いている薄い水色のワイシャツが風に揺らされ引き締まつた胸板が間から見え下半身にはスーツのズボンを身に着けている。そして右手の人差し指には蒼

い線で文様が刻まれたシルバーリングがはめられておりサングラスで見えにくいが鋭く細長い瞳が真っ直ぐに祐一を見据えている。

「相沢祐一この世界の> シャスマくか……」

このとき祐一はまだ気付いていなかつたその瞳こそが日常の終わりの証だったのだと。

ヒスカの家から帰宅するにあたって祐一はマンションから少し離れた位置にある公園を突つ切ることにした。

彼の自宅は公園を出て目と鼻の先に有るので姫坂家に向かう時はいつも利用している。住宅街の中央に広がるその公園は子供が屋外で少しだも遊ぶ機会を増やせるようにと市が五十年前に作ったものであり小学校の校庭程の広いスペースを保有している。

置いてある遊具も年代を感じさせるが定期的に整備されているらしくそこまで酷い損傷は見当たらない。日は落ちているが公園内に接地してある街灯と周囲の住宅から漏れる灯りのお陰で歩くのに不十分はなかつた。

(さつてと今日は家帰つたらアレやつてから寝つかな〜)

ぼんやりといつも就寝前に行つ日課について考えてながら公園内を進む祐一。だが公園の丁度中央に差し掛かつた瞬間周囲に異変が起つた。

「あれ、どうしたんだ」

辺りを見渡す雄一。

「……明かりが、消える?」

それは突然だつた。街灯も住宅から漏れる光も全て消え失せている。時刻は午後9時7分、寝付くにはまだ早い時間帯のはずだ。

「なんだ停電か?」

「知りたいかい」

不意に背後から声が掛けられる。振り返るとそこには男が一人立つていた、髪はカラスのように黒く夜だというのにサングラスを掛け地肌には胸元まで空いた水色のYシャツを下半身にはスーツのズボンを身に付けている。

「なんてことはない、ただこの空間を周囲から切り離しただけさ」

『空間を切り離す』男が淡々と口にしたその言葉を理解出来ない。

たまに公園周辺に現れると噂されている変質者だろうか。

「あんた何言つてんだ？だいたい夜にそんなサングラスしてる奴に突然んなこと言われても訳わかんねーよ」

とりあえず男を指差しながら訪ねる。

「それもそうだな、いや失礼した確かにこちらの不手際だった」

口の端を少し歪めながら男は答えた。

「なら……」

男は右手をゆっくりと振り上げていき真上に向ける。何となく指を目で追うとその薬指がポンヤリと青く光っている。

「これならご理解頂けるかな」

雨も降っていないのでいきなり水が降ってきて髪と服を濡らしていく、何が起きたかわからなかつた、いや正しくは信じられなかつた。男の掌から大量の水が吹き出しそれが鞭のようにしなりながら祐一の足下の地面を抉り吹き飛ばしたのだ。

「僕は一定量の水分操ることが出来る、川や湖は勿論、空気中や地面に含まれるものもね、残念ながら生物に含まれるものは無理なんだが。どうだい、手も触れずに水を操る能力ちからがあるなら空間を切り離す能力があつても不思議じやないと思わないかい？」

男の声は先程から変わらず淡々としている、まるで今起きている事態が日常生活の一部であるかのように両手を広げながら語つている。

(なんなんだこいつ、ありえねえよこんなこと)

手足から血の気が退くのが、背中に冷たい物が流れるのがわかる、得体の知れない恐怖が襲つてくる、このままでは。

「さて……」

男が再び腕を振り上げ水が集まり始める。

「今度は君の能力を見せてもらおうかな」

現状を信じられなくてもこれだけは理解出来た。このままでは命を奪われる。

わざと外している、先程からの男の攻撃を見ていて気付いた事だ。背中を向けて走つても自分の足下を狙いそのせいでよろめいても追撃される事もなかつた。

「アイツなにがしたいんだ、俺を殺すんじゃなかつたのか！？」体制を立て直しなんとか滑り台の影に隠れながら乱れた息を整えようとする。

しかし極度の緊張と恐怖のせいで思つように息が落ち着けられない。「本当になんなんだ、さっきから俺が逃げても追いかけてこないしアイツ本当に何が目的なんだ！？」

「どうした早く能力を見せてくれないか？」

（チカラ？ そりゃあさつきも言つてたような、一体なんのことだ？ もしかしてアイツがやつてるみたいに水を操つたりしてみろつてことか、だつたら…）

だとしたらやることは一つのみ祐一は滑り台から離れて男に近づいていく。足が震え吐き気が込み上げるがそれを押さえ込み相手を見据える。

「なんだ、ようやく能力を見せてくれるのかい」

「それなんだけど」

両手を挙げ降参の意思を示しながら。

「残念だけど俺にはアンタみたいなチカラはないんだよね、水どころかその辺りの小石も動かせないしさ、だからもし俺にそんな魔法みたいな事期待してんなら悪いけど諦めてくんない？」

その言葉を聞いていた男に変化はなかつた、先程と同じく祐一のことを見据えている、だが…

『もういいだる』

どこからともなく祐一でも男のものでもない声が聞こえてきた。再び男の周囲に水集まり始める。それをみた祐一はまた攻撃がくるか

と警戒したが水は祐一を襲うことはなく何かを形作つていぐ。

それは一匹の豹だつた

『もついいだらう、ここまでやつて田覚めないと言ひ』とはこいつに素質はないといつ事だ』

男の傍らに佇みながら水で形作られ青白い光を放つ豹は語る。

『この様なヤツに構つても時間の無駄だ次に行くぞ』

「しようがない」

男はヤレヤレと溜め息をつくと

「君はいつも自分勝手だねそれに短気だ、こっちにも考えがあると
いうのに」

『不服か』

「まあね、だけど時間がないのも確かだし今日は諦めるとしてよう」「どうやら自分が馬鹿にされてるようだがこの流れだとなんとか解放してもらおうだらうと祐一は安堵する。

「いや、今回はすまなかつたね、どうやらこちらの勘違いだったようだ」

「じゃあこのまま帰してもらおうとして」とか

「ようやくこの馬鹿げた出来事から解放される、そう思つたが。

「あへ、その事なんだけど

男が少し困り氣味に口を開く。

「こつちとしてはこの能力をしつてる人をそつ簡単に返せないんだ」

「はつ？」

「だからチャンスをあげよう」

『ウオオオオオオ』

豹が雄叫びを上げその姿を巨大な竜巻へと変えていく。

「今から現在の僕が使える能力全てを使って君を攻撃する、それに耐えられたら帰してあげよう」

「いやちよつと待てよ、んなもん無理に決まつてんだろー」

「ちなみに物影に隠れても無駄だよこの辺りにあるものじや防げな

いかられ」

「ふざけんなー。」

叫び男を止めようとするが男は一向に耳を傾けない、再び焦りと恐怖が心の奥底から盛りてくる。

(どうすんだよ、あんなのかわすのなんて無理だしアイツの言ひつており防ぐこともできないんじゃどうすれば)

「僕も出来れば殺したくはない、だから……」

男が手をゆっくり拳げていきその動きに合わせて竜巻も勢いをまじていく。

「生き残ってくれよー。」「

振り下ろされた腕に連なつて竜巻が襲いかかってきた。

「うあああああああ！」

一瞬で思考が奪われ頭が真っ白になる、今日の前にある現実はただひとつ。

(死ぬ、殺されるー。)

絶対な死、そして心が叫ぶのは。

(嫌だ、こんなところでこんなヤツに殺されてたまるかよー。)

生への足掻き。

絶対の現実と諦めきれない感情、相反する二つのものが心を埋め尽くしていく。

そんな中ふと自分の内側から声が聞こえた。

『生きたいか』

「なんだ！」「

自分の胸が熱い、それに気がつくと何故か恐怖が和らいだようだった。

『もう一度聞くぞ、お前は生きたいか』

「俺は……」

第一章 非日常との邂逅⁶

「結局期待外れか」

呴かれたその言葉は誰の耳に入ることもなかつた。男の放つた一撃は容赦なく祐一を襲い、今は視界を蒸発した水分が覆い隠している。

「やはり君の言つたとおり彼には素質はなかつたようだね」

残念だ、と溜め息をつく男に対してもう己の姿たる豹を作つた水の獣はいぶかしげに答える。

『愚か者が周囲をよく見てみろ』

「なに？」

相方に促され辺りを見渡すが辺りは水蒸気が包んでいるだけだ。

「水蒸気？」

ふと疑問に思ひ、自分は水分を水蒸気にするように操つてなどいなはずだ。

「こ」の水蒸気は君が起こしたものかい？」

『違う』

「じゃあ一体誰が」

『決まっている』

前方を見据えている相方の視線を追つとその先から熱風が吹いてきて男の頬をなでる。

「これは」

『そう、奴等だ』

その瞬間に前方で爆発が起こり熱風が襲つてくる。爆風により水蒸気が取り扱われ一人の少年が現れる。

少年、相沢祐一の体に傷は一つもなくその周囲は炎がうづまいていた。

「あれ、俺生きてるのか…うわあ！」

閉じていた目を開き場違いなスットンキヨな声を上げる祐一、確

かに自分が炎に囲まれていれば驚きもするだろう。

しかし驚きはしても不思議と恐怖は無かつた、一言で言えば守り

れていると何故かそう想える何かがそれにはあった。

「まさかこのタイミングで目覚め、しかも僕の一撃を防ぎきつてい
たとはね、さらに血りだけでなく周囲への被害すらない、まったく
驚かされる」

男の言葉通り攻撃を受けたはずの地面や遊具にも攻撃の痕跡は見
当たらない。

「なんだつたんだ、さつきの。急に声が聞こえてそれに答えて、そ
したら力を貸してくれるって」

『名を呼べ』

再び声が頭の中に響く

『我の名を』

「名前…」

知らない筈だ、声の主の名など。だが何故か一つの名が頭に浮か
んでくる、その名は…。

「紅纏いし導く咆哮（フイリウス クロム フランジエスカ）…」
少年の声に応え炎が舞い上がり踊り狂いその熱量に辺りが真昼の
ように照らされる。炎はその勢いを増していくやがて一つに収束し少
年の傍らに降りてくる。

「あれが…」

ようやく見つけた、その光景を田の畠たりにした男にはそれしか
なかつた。

「あれが…炎のシャスマ…！」

炎が弾け中から炎を纏つた黒い狼があらわる。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

狼の咆哮は夜空を切り裂きその場の空気を一瞬にして支配する。そ
の姿はまさしく炎の化身だ。

「お前が…」

恐る恐る声をかける祐一。

「助けてくれたのか？」

『……』

狼は答える「」とはない、その代わりに聞いえてくるのは拍手だった。

「いやー、恐れい^{ちがり}ったまさかこの土壇場で目覚めるだけでなくこれほどの能力を持つていたとはね」

手を叩きながら相方の豹と共に男が近づいてくる。

「なんだよ、まだやるつもりか」

身構える祐一、それに合わせて狼が祐一の前に出る、まるで少年を守るように。

「やつぱし、お前が守ってくれたんだな」

『……』

やはり狼は応えない、しかしそれでも今の祐一には恐怖はなかつた。

守つてもうらえるそつ確信出来たからだ。

しかし。

「大丈夫だ、僕は約束は守る主義でね、約束通り君は僕の渾身の一撃を防ぎ能力に目覚めた、今回はその勇気に敬意を表して見逃してあげるさ、それに。」

次の瞬間身体に激痛が走り意識が遠のいていき祐一はそのまま地面に倒れてしまう。どうにかして身体を起こそうとするがどうしても起き上がれない。

「能力に目覚めたばかりだと身体が変化についていけず人によつては意識を失つてしまふんだよ、特に君みたいな強力な能力の持ち主はね。今はゆつくりと休むと良いよ」

「ちつ……くしょ

その言葉を最後に祐一の意思は闇へと墮ちていった。

第一章 非日常との邂逅⁶

「結局期待外れか」

呴かれたその言葉は誰の耳に入ることもなかつた。男の放つた一撃は容赦なく祐一を襲い、今は視界を蒸発した水分が覆い隠している。

「やはり君の言つたとおり彼には素質はなかつたようだね」

残念だ、と溜め息をつく男に対してもう己の姿たる豹を作つた水の獣はいぶかしげに答える。

『愚か者が周囲をよく見てみろ』

「なに？」

相方に促され辺りを見渡すが辺りは水蒸気が包んでいるだけだ。

「水蒸気？」

ふと疑問に思ひ、自分は水分を水蒸気にするように操つてなどいなはずだ。

「こ」の水蒸気は君が起こしたものかい？」

『違う』

「じゃあ一体誰が」

『決まっている』

前方を見据えている相方の視線を追つとその先から熱風が吹いてきて男の頬をなでる。

「これは」

『そう、奴等だ』

その瞬間に前方で爆発が起こり熱風が襲つてくる。爆風により水蒸気が取り扱われ一人の少年が現れる。

少年、相沢祐一の体に傷は一つもなくその周囲は炎がうづまいていた。

「あれ、俺生きてるのか…うわあ！」

閉じていた目を開き場違いなスットンキヨな声を上げる祐一、確

かに自分が炎に囲まれていれば驚きもするだろう。

しかし驚きはしても不思議と恐怖は無かつた、一言で言えば守り

れていると何故かそう想える何かがそれにはあった。

「まさかこのタイミングで目覚め、しかも僕の一撃を防ぎきつてい
たとはね、さらに血りだけでなく周囲への被害すらない、まったく
驚かされる」

男の言葉通り攻撃を受けたはずの地面や遊具にも攻撃の痕跡は見
当たらない。

「なんだつたんだ、さつきの。急に声が聞こえてそれに答えて、そ
したら力を貸してくれるって」

『名を呼べ』

再び声が頭の中に響く

『我の名を』

「名前…」

知らない筈だ、声の主の名など。だが何故か一つの名が頭に浮か
んでくる、その名は…。

「紅纏いし導く咆哮（フイリウス クロム フランジエスカ）…」
少年の声に応え炎が舞い上がり踊り狂いその熱量に辺りが真昼の
ように照らされる。炎はその勢いを増していくやがて一つに収束し少
年の傍らに降りてくる。

「あれが…」

ようやく見つけた、その光景を田の畠たりにした男にはそれしか
なかつた。

「あれが…炎のシャスマ…！」

炎が弾け中から炎を纏つた黒い狼があらわる。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

狼の咆哮は夜空を切り裂きその場の空気を一瞬にして支配する。そ
の姿はまさしく炎の化身だ。

「お前が…」

恐る恐る声をかける祐一。

「助けてくれたのか？」

『……』

狼は答える「」とはない、その代わりに聞いえてくるのは拍手だった。

「いやー、恐れい^{ちがり}ったまさかこの土壇場で目覚めるだけでなくこれほどの能力を持つていたとはね」

手を叩きながら相方の豹と共に男が近づいてくる。

「なんだよ、まだやるつもりか」

身構える祐一、それに合わせて狼が祐一の前に出る、まるで少年を守るように。

「やつぱし、お前が守ってくれたんだな」

『……』

やはり狼は応えない、しかしそれでも今の祐一には恐怖はなかつた。

守つてもうらえるそつ確信出来たからだ。

しかし。

「大丈夫だ、僕は約束は守る主義でね、約束通り君は僕の渾身の一撃を防ぎ能力に目覚めた、今回はその勇気に敬意を表して見逃してあげるさ、それに。」

次の瞬間身体に激痛が走り意識が遠のいていき祐一はそのまま地面に倒れてしまう。どうにかして身体を起こそうとするがどうしても起き上がれない。

「能力に目覚めたばかりだと身体が変化についていけず人によつては意識を失つてしまふんだよ、特に君みたいな強力な能力の持ち主はね。今はゆつくりと休むと良いよ」

「ちつ……くしょ

その言葉を最後に祐一の意思は闇へと墮ちていった。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で①

ぼんやりと意思が戻り意識が覚醒していく。霞んでいた視界が晴れてゆき幾つかの染みがついた見慣れない天井が見えてきた。

「…」
「ここは？」

「気付きましたか？」

首を少しづらすとそこには一人の女性看護師が祐一の顔を覗き込んでいた。看護師は柔らかく微笑むと。
「すぐに先生を呼んできますから、まだ安静にしていて下さいね」
そう告げて病室から出て行ってしまう。

（ここは病院なのか？）

状況を確認するため身体を起こそうとする、まだ少し頭痛がするがなんとか身体に力は入ってくれるようだ。

周囲を見渡すと見舞い客用のパイプ椅子に部屋の角には簡易の洗面所、そしてベッドの隣には有料式のテレビが置かれている。恐らく個室の病室なのだろう。そして今度は自分の状態を確認すると白衣を基調とした手術着の様なものに着替えさせられていた。

「…あの後どうなったんだ？」

頭痛のする頭を抱えて昨日の出来事を思い出すとするがよく思い出せない。

「確かにペトラさんに食事に誘われてそれで飯食わせて貰つてマンションから出でそれから…あれ？」

何故だらつ、上手く思い出せない。まるでその部分にだけ霧がかかつたようだ。

「何があつたんだ…」

ぼんやりと考えているとドアがノックされ先程の看護師と無精髭を生やした中年の医者が入ってきた。とりあえず今は医者に自分の状況について聞くことにしよう。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で2

日曜の住宅街、時刻も10時少し過ぎと「う」とで階外出しているのかいつもより静かな道を制服に着替えた祐一は歩いていた。

「やっぱし納得いかね~」

あの後医者から説明された内容は正直納得がいかなかつた。祐一は一日前の深夜に病院の玄関で行き倒れておりそこを今朝の看護師に発見されたらしい。

昨日一日は文字通り死んだ様に寝ており今朝になつてようやく目を覚ましたというわけだつた。医者の話だと極度の疲労が原因らしく祐一が寝ている間に行つた検査では得に異常はなかつたので今朝の内に退院することになり現在にいたつてはいる。

「そこまで疲れるような事した覚えはないしそもそも病院に行つた記憶もないしな、だけどそれよりも」

貴重な休日を寝て過ごしてしまつた。贅沢といえばそのとおりだが訳も分からず一連休が潰れてしまつたのはやはり納得がいかない。「はあ~」

本日何度もか分からぬ溜め息が出てくる。まあ過ぎた事を気にしていくもしかたないと残りの一日をどう有意義に過ごすか思案しながら歩いて行くと我が家が見えてきた、そしてその前には。

「あれ、ヒスカか?」

「あつ~」

祐一の声に反応して紅い髪と翠の瞳を持つ幼なじみがこちらを向く。どうやら我が家に用があるらしく赤いTシャツと黒のスパッツと簡単な恰好をしている。

「遅い、どこいったの!」

「遅いって、別に待ち合わせしてたわけじゃ」

「しようがないじゃない、昨日も家にいないし携帯も繋がらないし待たされたこっちの身にもなつてよ、それになんで制服なわけ?」

「いつもどおり容赦なく置み掛けてくるヒスカ。

「まったく、それで何処行つてたのよ」

「ちょっと病院に」

ヤレヤレと答える祐一。

「病院つてどこか、悪いの?」

ヒスカの表情が僅かに曇る。

「あついやそのなんていつか

(しまつた)

『病院』それはヒスカを前に口にしてはならない言葉だった。普段は祐一に対しても非常に『お節介』なヒスカだが」と病氣に関しては元来の心配性のせいで沈みがちになってしまふ。

(どうする! 実は気絶しているところを保護されたなんて言つたら余計に心配させてしまうし)

なんとかごまかすために頭を働かせるが中々良い案が思い浮かばない。

「ねえ、ほんとに大丈夫なの祐一…」

ヒスカの表情が更に沈んでいく。それを見て焦つていく祐一。非常に気まずい状況だ。

「えーとその、そうだお前何か俺に用あるんじゃなかつたのか! ?

「えつ、うん、これ
なんとか話題をそらせて祐一は安堵する。そしてヒスカが取り出した物は。

「生徒手帳?」

「Jの前来た時忘れてつたでしょ」

そういうわれズボンのポケットを探るが確かに手帳は見当たらない。

「わざわざこれの為に?」

「だつて無いと困るでしょ

「まあ、そうだけど」

(「イツわざわざその為に来ててくれたのか、別に週明けでも良か

つたんだけど

いつもお節介が何故か今の祐一には嫌じゃなかつた。一日中眠つていたせいで頭が晴れないからだらうか。

(このまま返しても気まずいしな……)

一拍の間考えてあるアイデアを思い付いたこれなら暇も潰せて一

石二鳥だ。

「なあ、その、なんだこの後暇か?」

「えっと、うん一応」

いきなりの質問にキョトンとするヒスカ。

「じゃあさたまにはどつか遊びに行かね。」

「えっ、でも」

「大丈夫だつてそれに日曜なのに家にこもつてたらその方が体に悪い
いつつの」

「でも……」

「いいから」

少し困惑気味のヒスカの声を祐一が遮る。どうやらそれを聞いてヒスカも諦めがついたようだ。

「ハア……わかつた、そんなに言つなら付き合つてやりますか!!」

先程とつて変わりいつもの調子に戻る。とりあえず一安心だ。

「じゃあ準備もあるしとりあえず1~2時に駅前集合で」

「オッケー、遅れんじゃないわよ」

集合場所と時間を決めてお互いはそれぞれの家に向かつていった。
お互い少しだけ心を弾ませながら。

「ちょっと早かつたか」

腕時計で時刻を確認しながら祐一は呟く。

ヒスカと別れた後、とりあえず一日何も入れていなかつた腹に冷蔵庫の余りを詰め込みシャワーで身体の汚れを落とすと私服のジーンズと薄ピンクのYシャツに着替えその上から黒のベストを羽織り髪を整える。少し時間に余裕が有つたが遅れでもしたら。

「遅い、自分から誘つたくせに！」

などと言われるのは日に見えるのでさつさと駅前に向かう事にした。

現在時刻は11時48分、太陽も燐々と降り注ぎ軽い日焼けでもしてしまいそうな陽気だ。

（さつてと今日は何処いくかな、誘つたのは良いけど殆ど勢いだつたからとくに考えてなかつたし）

正直ヒスカと一人だけで出かけるのは小学校以来すなわち4年ぶりだ。子供の頃ならまだしも高校生ともなるとお互いそれぞの趣味も明確な違いが出てくる何処へ行くか思案しなくてはならない。

（とりあえず女子ってどういう所に行きたがるんだ、やっぱ服屋とか小物屋とかか？やべ、今更だけど何処行きや良いんだ？）

そういう考えているうちに前方から待ち合わせの人物がやつてきた。

「おまたせ」

軽く手を振りながらヒスカが近づいてくる。

その姿は先程とは違ひヘソが出てしまう程度の黒の半袖シャツの上に白の半袖のジャケットを羽織りジーンズ生地の短めのスカート、そして背を少し高く魅せたいのかローヒールのサンダルを履いている。心なしか薄化粧しており先程よりも唇に光沢があり、そしてアクセントなのか胸元には銀のペンダントが光っている。

「どうかな？」

「どうかなって？」

想わず質問に質問で返してしまつ。

「もう、久々の幼なじみの私服姿はどうですかって聞いてんの？」
腰を屈め下から覗き込みながらわざわざ質問内容を説明してくれ
るヒスカ。

「ああ、そういうことか」

『うーん』と唸りながらジロジロ観察を始めると少し恥ずかしそう
にヒスカは背をピンと伸ばす。

「そうだな、お前にこんな恰好してたっけ？」

「なつ」

「ガキの頃はへそなんか出してなかつたしいつもジー・パンだつたら、
化粧なんかもしてなかつたし」

「ちょっと、そんなの当たり前でしょー！」

突然噛みつかれて想わず後ろにさがつてしまつ。

「小学生の頃と今を比べるなバカ！」

何やら『立腹な』様子のヒスカ。そのままフンと横を向いてしま
つた。

しまつたと思つたが後の祭だ。

「わかつた、わかつた悪かつたつてほらーのとおり
手を含させて謝罪するが機嫌は治りそうにない。

「じゃあ今日一日はお前の好きな場所に行つていいからね」

「……本当でしょうね」

ジロリと視線だけ此方に向けて尋ねられる。正直かなり怖い。

「本当ほんつつとうです、今日一日はお付き合こしますーー！」

「…………」

場が沈黙に包まれ周囲から。

「なんだなんだ」

「やだ〜別れ話」

「…………」

「おっ、あの子かわい~」

「男の方は冴えねえけどな」

などと囁きが聞こえてくる。

(だあ~頼むからさつさと何処行くか決めてくれ!?)

当然心の中で叫んでも相手に伝わることはなく周りの視線に耐えるしかないこの状況はあまり心地よいものでもない。

どうやらヒスカも周りの視線に気付いたらしく少し気まずそうにしていた。

「じゃあ行きたいところあるから着いてきて」

「あ、ああわかった」

歩きだしたヒスカの後を追つて「行く祐一。周囲からの視線から逃げられた安心感と今日一日どうなるのか不安感が脳内で混ざりあいなんとも複雑な気分だ。

「まあ、しゃーないか」

「なんか言つた?」

「いやいや別に」

どうやら機嫌はまだ治つてないらしい。

さあこの後どうやつてこの幼なじみを勧めるか頭を悩ませることになりそうだ。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で4

「よしもりーーー！」

「うわ、ちょいまてつてーーー？」

「問答無用ーーどどめーーー！」

激しい効果音が鳴り響き画面に「YOU Lose」と表示される。

「よし、これで5連勝！」

ガッツボーズを極めながら叫ぶのはお節介幼なじみのヒスカだ。あの周囲の視線から逃れた後連れられてきたのは地元でも少し古株のゲームセンター『グッドラック』だった。3階建の店内の1階には最新の機種が、それ以外にはいわゆるレトロゲームが並べられた。その店内は学生よりも年忌のあるゲーマー達により賑わっている。いわゆる知る人ぞ知るマニアックゾーンだ。

「なにして祐一ーーいつつも学校帰りにゲーセン寄つてくれせに大したことないじやん。」「うるせえ、いつも違う店に行つてんだよそもそもこんなのがやつたことねーつーのー！」

わざわざ言葉を溜めてから嫌味つたらしく噛み付いてくるヒスカ。
(ちくしょ、むかつく~コイツ)

今プレイしていたのは20年程前に流行った格闘ゲームだ。たまにゲーム好きな担任教師が授業を脱線して話てるのを聞いたことはあるもののプレイするのは初めてである。

「つーかこのゲームお前かなりやりこんでじゅーねーのかー!?」

「あれ、ばれた?」

「あんなえげつねえコンボ使つてたら誰でも分かるつつの」

「いやーこの前たまたま友達に勧められてやってみたらハマっちゃつてさ、最近は結構来てるんだよねこの店

「そもそもって俺をカモリたかったと?」

「ありや、またばれた」

ペロリと軽く舌を出すヒスカ。

(ちくしょうなんで学校だと真面目なぐせに俺といふときはこんな
なんだよコイツ)

まさかあのヒスカに連れてこられたのがゲーセンでしかも一方的に力モれるなど考えもしなかつたのでどんどんテンションが下がつていぐが自分から今日一日付き合つと宣言してしまったために文句の一つも言えない。

(ハア、やるせねえ)

そんなことを考えている間にヒスカは立ち上がり出口に向かつていく。

「お~い、どこ行くんだ?」

ゲーム機に突っ伏しながら呼びかける。

「ちょっと早くしてよ次行くんだから」

「つぎ?」

「そつ、次、ほら早く早く!」

(はあ~)

心の中で溜め息をつき。

「へいへい仰せのままに」

立ち上がりわざと行儀良く軽く頭を下げる。「んで、どこ行くんだ?」

「いいから着いてきて」

言われるままに着いていく」とした。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で5

ゲームセンターを出た後はクロショップでお互い好きなアーティストの新曲を探し、バッティングセンターで身体を動かして休憩がら駅前のファーストフード店に立ち寄り現在は口も傾いてきたので帰路についていた。

「う~ん楽しかった」

軽く伸びをしながら満悦な表情のヒスカ。

「たまには体動かすのもいいよね」

「まあな」

「なに~、不満でもあんの?」

「別に、結構楽しかったしわ」

「そつ良かつた」

正直意外だった。てっきりやたらとファンシーな雑貨店や服屋に連れて行かれるとばかり思っていたので少し拍子抜けだった。今日のヒスカの行動は普段の自分とやけに酷似していたからだ。(まさかコイツがこんな趣味だったなんてな、ガキの頃とあんまり変わらないな)

「でも良かつた気晴らし出来たみたいで」

「へつ?」

思わず声が裏返つてしまつ。

「なに変な声出してんの」

「だつてお前…」

ふとした疑問が頭を横切る。

「もしかして俺に合わせてくれたのか?」「えっとその…」

心なしかヒスカの顔が赤い様な気がする。

「…だつて言つてたじやん気晴らしに付き合つて…」

「でも今日一日好きなとこ行つて良いって…」

「だから…」

言い終わる前に打ち切られる。

「好きな様にしたの、悪い！？」

いつもどおり早口で捲し立てて横を向いてしまつヒスカ。

「…………」

啞然としてしまつ祐一、質問してしまつたことに少し後悔してしまった。

「あ～その…なんつーか
頬を少し搔きながら。

「…その、サンキューな
それだけ伝える。

「…感謝しろ」

呴かれたその一言を最後に会話が途切れる。だがそれは決して不快なものではなく不思議と心地よいものだった。
しかし。

「やあ」

後ろから聞こえたその一言でその空気が破られた。

「奇遇だねこんな所で会つなんて」

振り向くと一人の男が此方に向かつて歩いてくる。

髪はカラスの様な黒のセミロングで黒のサングラスを掛けている、胸元まで開いた水色のYシャツを地肌に直接身に付けているため引き締まつた胸元が隙間から見えていて下半身にはスースのズボンを履いている。

(…誰だ？)

「すんません、誰つすか？」

「ちょっと祐一失礼じやない知り合いなんじょ」

「んな」と言われても

「すみません、コイツロが悪くつて」

「おい」

自分の代わりに謝りついでに口の悪さを指摘されヒスカに突っ込んでしまう。

「おいおい悲しいな」一昨日会ったばかりじゃないか

「だからあんた誰…」「祐一君」

名前を呼ばれた瞬間頭に何かビジョングが浮かんできた。

夜の公園、辺りから明かりが消え男が近づいてくる『^{ちから}能力を魅せてくれないか?』

男の手から水が吹き出しそれが襲つてくる。それを吹き飛ばす自分を護る炎そして。

『紅纏いし導く咆哮(フイリウス クロム フランジエスカ)!!』

何かの名前を叫ぶ自分、現れる一匹の狼。

そして。

「う…」

足下がぐらつきよろめいてしまつ。

「アンタは…」

「思い出したかい?」

思い出した、思い出してしまつた。忘れていた知りたかったはずの現実を。

「ちょっと大丈夫なの」

ヒスカが心配そうな顔で覗き込んでくる。

「あつああ、ちょっと暑さにやられただけだ」

「おやそれはいけないだつたらそこに行き着けの店があるから一昨日のお礼に少しそこで休んでいくと良い、どうだい?」

「アンタなに言って…」

「お願いします」

自分が返事をする前にヒスカが答える。

「おま、何言つて…」

「だつて今朝も病院に行ってたんだしょ今は休んだほうが良いよ、それにこの人もお礼したいつていつてるし何があつたか知らないけどこいついう時は善意に甘えてもいいと思つ

「いや、だけど」

「祐一」

じつと皿を見つめられる。『ややらこつものお節介が出てしまつたようだ。』こうなつては諦めるしかない。

「はあ、分かった。そんかしついてくんなよ」
「わかつてゐる、そこまで図々しくないつて」

くるりと男に身体を向けるヒスカ。

「それじゃ『イツの』ことよりしへお願ひします
ペコリと頭を下げる。

「ああお任せを、彼にはお世話になつたからねたつぱりお返しかけてもらひうれ」

「そんな氣をつかわなくとも『イツなんて水でも十分ですよ
「てめ、ふざけんなこいつらー応病人だつつのー」」

「じゃつバイバイ」

逃げる様にその場を去つて行くヒスカ。

「たくつ」

(さつきまで少し見直していたのにヒスカはヒスカいつもどおりか
よ)

「さあそれじゃ僕達も行こいつか」

「……ああ

男に促され先程の道を歩き始める。

「彼女元気な子だね、恋人かい?」

「そんなんじゃねえよ」

素つ氣なく返事をする。今は他に考へることがある。

(どうするどうやつて『イツから逃げる、』には駅前だしこんなに人がいたら多分あの変な力は使えないだらしだったらチャンスはあるとりあえずその路地に逃げ込んで)

「そうそう

男が小声で話しかけてくる。

「逃げるとか考へないほうが良いよ、もしそんなことをしたらそつだな…とりあえずその広場は消えてしまつだらうね

「ううう

「てめつ……」

思わず声を荒げてしまいそうになるがなんとか抑える。

「大丈夫、君が僕に付き合つてくれさえすれば何も起きないさ何もね……」

「……わかつた、相手してやるから何もすんなよ」

「もちろん」

（ちくしょう、これじゃ逃げらんねえか。しょうがなねえ今は様子を見るしかないか）

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で

男に連れられて歩いている道には見覚えがあった。街路樹が立ち並び「コンビニや書店など学生にとって有り難い店が軒を連ねるその道は。

(こじ通学路だよな)

祐一の通う高校へ続いている道だ。このまま真っ直ぐ進めば10分ほどで到着するだろう。

(まさか学校で俺にあの力を使わせる気か…)

確かに今日は休日なので人はいない、そしてこの辺りで広いスペースがあり後始末が容易に出来る場所としては校庭は打ってつけだろつ。

(どうすんだよあんな力使い方なんて分からねえし使えなかつたら何されるか分かつたもんじやねえ)

心拍数が上がり背中に冷や汗が流れる。

「何処に行くんだいもう着いたよ」

男の声で我にかる。どうやら目的地に着いたらしくそれに気付かず行き過ぎたようだ。

「ようこじや」

そこは。

「僕の店へ」

うやうやしくお辞儀をしながら男が木製のドアを開けドア上部に取り付けられた鈴が音を立てる。『Blue Moon』と書かれた看板が掲げられたその店は喫茶店だった。

「喫茶店…なんでだそれに今自分の店だつて?」

「言つただろう一昨日のお礼をするつてさあ入つてくれ」

男に促され警戒しながらも店に踏み入る。内装は道に面したかぜがガラス張りになっている以外は全て木製で席もカウンターが5つ四人掛けのテーブル席が2つとこじんまりしておりスピーカーから

流れるジャズがどこか懐かしい気分にさせる。

「さて飲み物は何が良い？今のお勧めは…そつだなアイスラテなんてどうだい、なかなか良い牛乳と豆が入ったんではね」

「それでいい…」

「ふふ、分かつた好きな所に座ってくれてかまわない」

壁際のテーブル席にすわることにする、気休めだがカウンター席よりは何かあつたときにげ易いだろ。ひ。

（本当に何考えてんだアイツ）

男の方は紺色のエプロンを身に付けコーヒーを淹れているその姿はどこから見ても喫茶店のマスターだ。

（まさか本当に茶をおこしててくれるだけ……んな訳ないよな）

「お待たせしましたアイスラテになります」

目の前にアイスラテが置かれる。

「どうしたんだい何か考え方かな」

「別にそんなんじやない」

「そうか、それじゃ僕も相席させてもらひよ」

自分の分のアイスラテをテーブルに置きエプロンを椅子に掛けて

から祐一の向かいに男は座る。

「自信作なんだ早く飲んでみてくれないかい」

「……」

「どうかした？」

「お前のと取り替えるよ」

「なぜ？」

「毒でも入つてたら困る、さすがに自分には入れないだろ」

「まったく要心深いね君は」

お互いの飲み物を交換する。

「これで良いかい？」「ああ、それじゃ…」

「また、質問するなら先に飲んでからにしてくれ」

「…わかった」

グラスに口をつけ少し口に含む牛乳の濃厚な甘みとコーヒーの香

ばしゃが混ざりあい口一杯に広がる。

「美味しい」

「それは良かつた」

男も自分の分に口をつけた。

「それじゃあ本題に入らつか何か聞きたいことはあるかい？」

「あの力」

まずはそこからだ。

「いつたいなんなんだあれ、こきなり水が襲つてきたり俺の体から火がでたり」

「ふむ、やはりそこか話すと長くなるが…」「話せ」

男を睨みつけ催促する。

「…それじゃあまず君は『世界の表裏』といつ神話をじつっているかな」

「あれだろ神様が世界を一つに分けたっていう学校で語りやつ」

「その通り、それじゃあそれがもし事実だとしたら」

「……はい？」

「そして君には神話に登場する光の力が宿つていると言つたら君はしんじるかい」

「あの神話が実話…」男は胸ポケットからなにかを取り出した、銀貨だ。

「かつて世界は一つだつた。しかし遙か昔争いが続き世界は一つに分けられ今はお互に触れ合ひことはできなくなつているこの『コインの表と裏のようね』

男は「コインを指で弾きそれを空中でキャッチする。

「だが2000年程前に問題が発生してね、二つの世界のバランスが崩れ始めたんだ世界は二つに分かれてもお互いが支え合つ形で存在していただからどちらがかけても世界は消えるまさしく『コインセ

ラテを口に含む先程と違ひ味を感じない。少し頭の中を整理するつもりでもう一口含む。

「具体的にはこちらの世界つまり光の世界の力が弱り始めている、そのせいで本来ならこの世界にないはずの夜が現れ最近では徐々にその時間帯も長くなっている。そこで君に協力してほしいのさ世界のバランスを保つ為に光の能力を持つ君に僕達闇の民はね『闇の民…』

一瞬考えそして疑問が浮かぶ。

「ちょっと待てよそれじゃああんたもう一つの、闇の世界から来たつていうのか！？」

「そのとおりある一定の条件を満たせば世界を行き来することなんとか可能さ、まあそれなりの代償は支払うけどね」

「……」

沈黙が流れれる。

「…そうだよな、アンタは無茶苦茶なことしか言わないよな」机に手を叩きつけ再び男を睨みつける。

「ふざけんなもつと真面目に話せよ確かにこの前の夜あんな訳わからんねえもんみせられたけどなそれでも無茶苦茶だ！…」

「それでも事実だ」

男のこえは先程とかわらず飄々としている。

「今僕が話した紛れもない現実さ、信じる信じないかは君次第さ」「奥歯を噛み締め自分落ち着けとに言い聞かせる。

「じゃあそれが本当だとして俺はどうすれば良いんだ」

「簡単さ仲間探しを手伝つてほしいそれだけだ」

「仲間？」

「そう、君達光の民の能力をシャスマ僕達闇の民の能力をファルマと呼ぶ」

「シャスマ……」

この男に襲われた時に自分を護つてくれた力のことを思い出す。

「それぞれの能力は4つの属性に分岐する、シャスマは炎、風、雷ファルマは水、木、土そしてそれを統括するのが光と闇だ君にはそれらを扱える人間を探すのを手伝つてもらいたいんだ」

「そんなことしてなんになるんだ俺を巻き込むな……」

再び机を殴りつける。

「別に無理にとは言わないよ、君には頬もしい護神^{ヒツジ}がいるしね」

「『シン』？」

「あの時に君を助けたあの狼さ、能力は自らを象徴する姿をとる」とがあるそれが護神」「あつともう訳分かんねえ！」

こめかみを抑えて深呼吸するが落ち着く気配はない。

「確かに今すぐは理解出来ないだろうね、今日はもう帰ると良い」としてよく考えてみるとことだ気が向いたらこのへ連絡してくれ

男が名刺を差し出すそこには『Blue Moon 韓国店 榊原

靈』と電話番号が書かれていた。

「ちつ！」

名刺をむしりとり席を立ち上がる。

「おつと残さないでくれよ自信作なんだから

「ツー？」

グラスを掴み中身を一気に飲みほしグラスを机に叩きつけ店の出入
口に向かつ。

「いいか俺は絶対にお前に協力なんかしないからな

ドアを乱暴開けそのまま出していく冷たい夜風が吹いてくるが今は

それも気にならない。

今は何も考えられなかつた。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で 7

昼間とうつて変わり冷たい夜風が住宅街を吹き抜け身体に突き刺さる。喫茶店を出てもうどれぐらい歩いただらうか、普段通っている道なのに頭が空回りよく分からない。

「……ちつ

近くにあつた空き缶を蹴ると高い音が夜空に響く。

「ほんと、訳わかんね……」

家に着いたら少しは落ち着くだらう。

しかし…。

「おわっ！？」

突然足下に青白い何かが走り煙が上がる。

「ありや外しちやつた！」

正面から誰かが近づいてくる。

「やっぱ暗いと狙い難いね～でも近づけば当たるかな？」

暗闇から出て来たのは二ツト帽を深く被りパーカーを着た若者だった。

「なんだよお前…」

「ん～誰でもいいじゃんだって君死ぬんだし」

「ツ！？」

「おいで～臆病な野心」クルップラー

再び青白い何かが光何かを形作るそれは雷で作られたトカゲだ。

『ぐるるるるるる、今回の獲物はコツイ？喰つていいの？』

(アイツまさか！)

「能力者…」

「ん～今頃気付いた？」

若者とトカゲが身構える。

「じゃあ謎も解けたし～バイバイ～」

同時に祐一に向かつて突っ込んでくる。

「ツー？」

後ろに跳んでそれを避けるがそのまま倒れこんでしまってすぐさま体制を立て直す。

「ハアハアなにすんだ！！」

「ん~だから君を殺すつて……」

「何でだよ！！」

相手を睨みつけ叫ぶ。

「お前のそれ雷だらだつたらお前もこっちの世界の人間だらなんで俺を狙うんだ！！」

「う~んだつてそれが僕の仕事だしき~死にたくないなら君も能力ちから使つたら？」

『そ~そ~使つたら~』

再び相手が身構える。

(使えって言つてもどつづりや使えんだよ)

「それじや」

若者とトカゲの雰囲気が変わる。

「死ね」

トカゲが雷を放ち若者がそれを纏い鋭い突きを繰り出してくる。その速度は速く避けられない。

「うわあ！？」

(ふざけんなこんなところで死んでたまるかよー！)

鼓動が高鳴る呼吸が速まり額に汗が吹き出すそして。

『生きたいか』

声が聴こえる。

『お前は生きたいか』

「俺は……」

その声に応える。

「俺は生きたい！」

『ならば力を貸そう』

次の瞬間若者が吹き飛び派手に転がりしき声を上げる。

「これつて…」

炎が祐一を囲んでいる、まるで彼を護るようにな。

『名を書く森の名を』

天を仰ぎ

天を仰ぎ力強く叫ぶ。

「紅纏いし導く咆哮（フィリウス クロム フランジエスカ）！炎がそれに応え収束していき中から一匹の狼が現れる。炎に焼かれた黒炭のような光沢のある毛並に燃え盛る炎を纏つた炎の化身だ。

「お前来てくれたのか！」

二〇一〇年

「相変わらず無口だな、まあいいや今は…」若者ヒトカゲが起き上がる。その瞳は。

一
痛
つ
て
：

殺氣に満ちていた。

新編 本居宣長全集

「殺す！ 目ん玉くじ貫いて腕をばらして腹綿引き抜いて殺してやる

! !

『喰つて喰つて喰いぬくござる……』

ノルマニードの文庫

やはにそひた前と同じく、リラフカのたけで恐怖が消えてい
く。

「テメエなんかに負けるかよー！」

必ず勝てる、そう確信出来た。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で

『シャツ！』

『グオオオオオオオオ』

黒き狼と雷のトカゲが空中で交差し空気が震える、狼が牙を突き出せばトカゲはそれを避け雷を放つ、しかし狼はものともせず猛攻を繰り出す。

「うおおおおおおおお…！」

祐一も拳を硬く握りニット帽の男に殴りかかる。拳は掠りもすることもなくかわされ続けるががむしゃらに拳を振るい続ける。

だが…

「うぐッ…！」

相手の膝蹴りが脇腹に決まり悶絶してしまつ。更にそこへ鋭い爪が襲い腕を肩を頬の皮膚を薄く裂かれ血が薄く滲む。

追撃されるとと思つたがニット帽は祐一から距離をとりそして。

「……おい臆病な野心クラッブラーテメエ手え抜いてんじゃねえしつかりこいつちに能力を寄越しやがれ！！」

ニット帽が手を振るうと小さい火花が散り僅かに辺りを照らす。

「こんなんじや皮をひん剥くことも出来やしねえ！！」

『煩せえ！さつきからこの犬つころが厄介なんだよ…！』

「だつたらアレやんぞ、さつさとこいつち来い！」

『チツ』

『グオオオオオオ』

逃がすまいと狼が口から炎を放ちトカゲに直撃し焼きつくしていく。

『ギャババババゲゲゲゲ』

吐き気を催す汚らしい叫びと物が焼ける匂いが立ち込めていく。(やつたのか…)

しかし上体を起こし祐一が見たものは傷一つなくニット帽の傍ら

に佇むトカゲの姿だ。ただ尻尾が切り取られたように無くなっている。

「そんな、フィリウスが倒したはずじゃ」

『ゲゲゲ知りたいか、ん、知りたいか? だつたら教えてやんよトカゲつてのはな殺られ そうになると自分の尻尾を切り落としてでも生き残らうとすんだよだからな…』

「コイツは尾があれば何度殺されても死なねえんだよまったく臆病なヤツだぜっ」

『ウルセえ、テメエのせいでコチトラ尻尾全部使つちまつたんだぞ!』

トカゲがニット帽を睨みつける。

『たくつ尻尾全部使わなきや再生出来ない威力なんて聞いてねえぞ、いいかあの犬つころだけは喰わせろよ』

「ああああ解つたからさつさとアレやれよ」

『ケツ!』

「何をする気なんだ」

『立て』

狼が祐一の前に降りてくる。

『くるぞ』

「臆病な野心に潜は食らいつく牙…」

トカゲが光を増してゆきニット帽の身体と同化していく。

「こい(イータ)!」

「ゲエエエエ…」

またしても汚らしい叫びを上げてトカゲが消えていくニット帽の両手に何かが現れていく。

それは禍々しい一対のナイフでニット帽の身体から溢れる電撃に反応しているのか金色に光っている。

「あれは…?」

『契約』

狼が答える。

『シヤスマと護神が眞の意味で魂を一つにした証だ』

「魂を一つに、そんな事が…」

『護神は自らの認めた者が自身の魂の名を呼んだとき魂の形を具現化した姿となりその者に力の全てを貸し与えるそれが…』

「契約か」

立ち上がりながら答える。

「なに『じちゃ』『じちゃ』喋つてんだあ！」

「ツ！」

ニット帽がナイフを構え切り込んできた。そのナイフが僅かに触れるだけでコンクリートの壁が抉られていぐ人体が受けければ助からぬであろう威力だ。

『ウオオオオオオオオオ』

狼がそれを向かえ打つ。

だが…

『グオ！』

ニット帽の横薙ぎの一撃で吹き飛ばされコンクリートの壁に激突してしまう。

「フィリウス！？」

信じられなかつた。あれほど強く自分を護つてくれていた存在がたつたの一撃で倒されたからだ。

「シャアアアアアアアアアア」

再びニット帽が突つ込んでくる。その切つ先が狙うのは祐一の首だ。

「うわあ！」

『喰わせろおおおお』

ナイフへと姿を変えたトカゲの叫びも何処からか聞こえてくる。動けない、かわせない、勇気など微塵も残つていない。あの時と同じだ榎原 霞に襲われた時と同じ様に恐怖が心を支配していく。ナイフが祐一ののど元を捕らえた。だが…

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアア」

悲鳴を上げたのは祐一ではなくニット帽の男だった。よくみると弱々しい炎がニット帽の手首を焼き焦がしている。

『ふざけるな』

そして聞こえてくるのは黒き狼の呆れかえった台詞。

『我の主はまさかここまで腑抜けだつたとはな』

「フイリウス…」

『お前は生きたいと願つただからこそ我は現れたお前の願いを叶えるために、だがもういい』

狼は立ち上がり身構える。

『やつは我一人でやるお前は何処かに隠れていろ』

「…くつ」

なにも言い返せなかつた。生きたいと願いながら死を覚悟してしまつた。護られていると安心しきつていた。

「俺は…」

「テメエだ…」

ニット帽が再びナイフを構える手首の炎はもう消えていた。

「テメエから先に殺つてやる、覚悟しろ糞犬ウラアアア！」

『グオオ』

ニット帽のナイフが正確に狼の急所を捉えていく。その度に炎を吐き出し迎撃しようとするがそれも相手の雷に塞がれる。

「フイリウス、アイツもしかして」

先程と比べ狼の動きはどこかぎこちない。

「さつき壁にブツカツタときのダメージが残つてるんじや
「死ねえ！」

ニット帽が遂に狼の動きを捕らえ雷が畳み掛ける。

「フイリウス、死ぬなああああああ」

咄嗟に叫び走りだす相棒を助ける為に、もつ一度伝えるために『生きたい』とそして。

『喰い殺す！』

「しゃあああああ！」

手を伸ばすそして…

「俺も一緒に戦うだから！」

思いの丈をぶつける。

「死ぬなフイリウスウウウウウウウウ！」

辺りに声が響く何よりも強い魂の咆哮が。

《呼べ！》

「フイリウス…」

『その意志に偽りなければ呼べ我の魂の名を…』

「遅えええええ」

二ツト帽の雷撃が狼に落ち辺りを焼きつくす。近くの家を砕き地面を抉り後にはなにも残らない。

《おいおいまだ喰い足りねえぞ》

「くひっ」

二ツト帽の頬が吊り上がる。

「くひやややややなんだこの程度かツマンねえツマンねえな、おい！」

それは下品な笑いだ。

「何が一緒に戦うだ、魂の名を呼べだ？バカじやねえのだったたら聞かせてみろよ…」風が吹き荒れたそれもただの風ではなく熱風が。

「くひ？」

《誰が殺されたと？》

「はっ？」

二ツト帽に包まれた頭に直接声が響いてくる。

「そんなに俺の相棒の名前が聞きたいなら聞かせてやる」

今度は低い祐一の声が耳に響く。

祐一は大きく息を吸い込むと放つた。

「咆哮が導くは全ての終焉…」

『魂の名』を。

「火具樂！」
かぐら

祐一の周囲に炎が渦巻く、それが集まり祐一の目の前に一本の火柱が産まれその中から何かが出てくる。

それは柄から刀身までまるで炎に焼かれた黒炭のような光沢の黒い日本刀だ。

「これが…」

日本刀を手にとる。

「フイリウスの魂の形」

その刀身からは常に熱が放たれ持っているだけで体力を奪われる。
(熱い、だけど持つてると心強いそれに)

火具樂を中段に構える。

「これで俺も戦える！」

「なうにが戦えるだ」一ツト帽が近づいてくる。

「だつたらその魂の形とやらを…」

一ツト帽子が一気に踏み込んでくる。

「ぶつ壊してやらあ…」

『食いつくしてやるうー』

肩と腕に力がはいる、一体どうやって対処する。

(避けるかそれとも…)

『振るえ!』

「フイリウス！」

『前に進むなら我を振るえ、さすれば道は開かれる！』

「…ああ、わかつたお前を信じる！」

火具樂を上段に構え直し一ツト帽を見据える。今心にあるのは恐怖ではなく。

「くらえ!」

前に進む勇氣だ。

刀身を振るうと同時に刀身から炎が放たれる。その量はビル一つくらい軽く吹き飛ばしてしまいそうだ。そして炎は全てを飲み込んでいった。

第一章 近しい異常と遠き日常の狭間で⑨

火具樂から放たれた炎が辺りを埋めつくしていく。それは空を焼き大地を喰らい勢いを増してゆき後に残つたのは無惨にも焼きつくされた建物の残骸だ。

「俺は……」

その光景を目の当たりにして気が狂いそうになる、何故ならこの光景を創り出したのは『相沢祐一』、即ち自らだからだ。

「うふっ」

火具樂を地面に突き立て片膝をつき吐き気が込み上がるがそれを抑え込む。それでも恐怖は消えない。

「俺、殺しちまつたのかあのトカゲ野郎を……」

人を殺したという恐怖は消えない。

「俺は……」

そして殺したのは二ツト帽の男だけではない。壊された家に住んでいたであろう多くの人々をその手にかけてしまった。

「これが現実さ」

聞いたことのある声が後ろから迫つてくる。

「この日常では有り得ないこの光景こそが今の君の現実なんだよ」「あんたか……」

振り返らなくても判る近づいてくる人物は。

「神原 霞だけ」

力なく祐一は呟く。

「ふふ、覚えて貢えて光栄だよ」

「何しに来たんだよ」

「酷いな君以外のシャスマの能力を感じて来てみたら君が神原つてから結界を張つてあげたのに」
男がわざとらしく溜め息をついた。

「結界……」

その言葉の意味を理解するのに一瞬時間要した。結界が張つてあつた、つまり空間が切り離されている。

「…皆死んでないのか？」

「そのとおり」

「そつか、でもあのトカゲ野郎は…」

「彼ならここにいるけど」

「なつ…？」

榎原の台詞に反応して膝をついたまま後ろを振り返る。そこには二ツト帽の男を肩に担いだ榎原が立っていた。

「そいつ！」

「君の一撃が当たる前に助け出したんだよ、そのかわり氣を失つて貰つたけどね、つまり君は誰も殺していないのさ」

「……」

先程の恐怖が消えていくかわりに身体から力が抜け尻餅をついてしまうが今は気にならない、今あるのはただ安堵だけだ。

「だけど…」

しかしその安堵感を榎原の声が遮る。

「さつき言つた様に只の住宅街を一瞬にしてこんな無惨な姿に変えてしまう能力を持つのが君の現実さ、特に君のシャスマは強大かつ目覚めたばかりで不安定、次いつまたこんなことになるか…」

榎原が祐一を見下ろしながら言葉をつむぐ。

「僕がシャスマを探しているのは世界を安定させる以外に能力の暴走が起こりこんな事にならないようにするためでもある、そして詳細は不明だけどこの男の様にシャスマを狙う者達もいる、これが意味するのは君達は常に危険に晒されているということ…」

次第に榎原の口調が鋭くなる、まるで別人のようだ。

「…どうすればいい」

再び力なく祐一は呟く。

「どうすれば…」

「僕に協力してくれるなら能力の制御方を教えてあげるよ、だけど

…」

榎原の掌に水が現れ渦を巻いていく。

「それが無理なら今ここで君には消えて貰う、あれほど巨大なシャスマは野放しにできないし消耗仕切った今の君ぐらい消すのは簡単だからね」

榎原の意志を具現化するように水が勢いを増していき耳障りな音を立てる。本能で判るこの男は本気なのだと。

「これが最後だ、どうする相沢祐一」

「…………」

一瞬沈黙して祐一は答えた。

「わかった」

火具楽を支えに祐一は立ち上がる。

「協力してやる、その代わり戦い方も教える自分の身ぐらい自分で守つてやる、他のヤツは誰も巻き込まない！」

先程までと違い力強く答える。迷いを振り切り決意する。

「そうか」

榎原が片手を挙げて指を鳴らすと空気が弾け周りが元いた住宅街に切り替わる。

そして榎原は二ツト帽の男を地面に降ろすと恭しく一礼し。

「ようこそ、僕達の世界へ」

そう告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080/>

世界の表裏 BLACK or WHITE

2010年10月23日07時59分発行